

はじめに

本書は、2018年度より2020年度まで日本学術振興会科学研究費助成事業の支援を得て推進した基盤研究(B)「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮したCEFR能力記述方法の開発研究」(Research and Development of CEFR Proficiency Description Methods with special consideration for linguistic types and socio-cultural diversity of Asian Languages) (研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号18H00686)の研究成果を報告書としてWeb上に公開するものです。

本課題研究では、EUの言語教育改革の中核をなすCEFR(Common European Framework of Reference for Languages「ヨーロッパ共通言語参照枠組み」)の再評価と問題点を包括的に検証しています。EU地域から日本を含む世界各地に受容が拡がりつつある中で、特に我が国と近い関係にあるアジア諸国での言語教育の実情に合わせた導入の経緯と実績を調査し、CEFRの思想的基盤の再検証を試みるとともに、より柔軟なCEFRの適用を可能にする枠組みと工夫をアジアからの発信として研究を続けてきました。

本研究プロジェクトは、東京外国語大学語学研究所を拠点にして遂行した先行する基礎的研究を継承し、その実績の上に計画されました。まず、2006年度より基盤研究(B)「拡大EU諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」(3年間、代表者富盛伸夫)、及び、続く2009年度より基盤研究(B)「EUおよび日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究」(3年間、代表者富盛伸夫)では、EU加盟各国での現地調査をとおして、その理念と実施面でのギャップなどに光を当てました。この問題意識を出発点として研究の対象を拡大し、2012年度より基盤研究(B)「アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究」(3年間、代表者富盛伸夫)では、アジア諸国へのCEFRの浸透度と通言語的枠組みの有効性を調査しました。前回の研究プロジェクトは2015年度より2017年度まで基盤研究(B)「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」(代表者富盛伸夫)として推進され、「非EU諸語」への適用には多様な言語類型や社会・文化的背景を考慮した適切な運用が必要となる、という認識が得られました。今期の科研活動では、言語能力測定方法の開発のみならず、CEFR評価の難問である複言語・複文化社会での「社会文化的適切性」の検討と、「社会文化的要素を重視した教材開発」を多くのアジア諸語教育の専門家の協力を得て行うことができました。

EU評議会(Council of Europe)の側でもCEFRの検証作業は続けられており、2018年2月にCEFR, *Companion Volume with New Descriptors*として2001年版CEFRの改訂追補版を提示し、2020年5月には、より具体的で整備された*Companion volume*が公開されました。これらでは、複言語・複文化的背景を前提とする様々なコミュニケーション能力と仲介能力の研究に新たな方向性を取りつつあります。本科研プロジェクトが十数年間抱いてきた基本的問題意識はこれらに示されたものとまさに同質のものであり、私たちの研究はさらに、アジア諸地域での研究を軸足のひとつとして、新たな異文化間言語コミュニケーション能力測定方法の開発から教育現場への還元へと展開される可能性を持つのではないかと期待しています。私を企画代表者とする研究活動は、研究分担者・研究協力者、また、国内外からの講演者など、多彩で優れた関係者のお陰で順調に遂行できたことを報告するとともに、皆様のご協力に心より感謝いたします。

この成果報告書と合わせて2020年3月に以下のURLに公開した中間報告書もご参考になれば幸いです。
(http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/Asia_CEFR2020/index.html)

最後に、研究拠点として多大な便宜を図っていただいた東京外国語大学語学研究所と、研究補助や本報告書の編集作業に尽力して下さった東京外国語大学語学研究所補佐の深尾啓子さんと東京大学大学院のYI Yeong-ilさんに深く御礼申し上げます。

2021年3月

研究代表者 富盛伸夫(東京外国語大学)